



さいかのわら
賽の河原

とくなのぞみ

電子書籍の操作について

- ・ 目次をクリックすると、該当ページまで移動します。
また、移動先ページの見出しをクリックすると、目次に戻ります。
- ・ 「十字キー」やマウスのホイールを使用して読み進めます。
- ・ 「フルスクリーンモード」に設定すると、読みやすくなります。

「フルスクリーンモード」設定方法

メニューバー「表示」→「フルスクリーンモード」

Escキーで元の表示に戻ります。

※パソコン環境により、「フルスクリーンモード」が使用できない場合があります。

賽の河原

とくなのぞみ

さいのかわら

文芸社



はじめに

賽さいの河原かわらで石を積む。鬼が現れ、石を崩す。それでも子どもは石を積む。賽の河原で子どもは石を積む。

原稿を書く生活も、三年目を迎えました。今回は少し趣向を変え、今までの章立ての、すきまからこぼれ落ちていった端切れの文章を、パッチワークのようにまとめてみました。主婦根性丸出しの、「もったいない精神」です。昔、お菓子作りに興味を持ったことがあり、パイ生地パイ生地の作り方について、興味深く読んでいました。すると最後に、こうあったのです。「丹精込めて折り上げたパイ生地は、どんな小さな切れ端も、いとおしく思うもの。切れ端も捨てないで、オーブンで焼いて召し上がれ」

さて、前作『なぞときおとぎ話』に対する反応ですが、夢分析が面白かったというご感想をいただき、うれしく思います。特に「夢その③」透明人間の夢、について、「おとぎ話のような白いロングドレスに長いヴェール」とは要するに、花嫁衣装のことではないのか、というご

指摘を多くいただきました。鋭いご指摘と思います。

「花嫁衣装のまま逃走する」、あるいは「花嫁衣装を脱ぎ捨てる」とは、どういう意味なのでしょう。

「古い価値観からの逃走」、そうかもしれません。しかしふしぎなもので、このことばからはさらに、対立するふたつのイメージが浮かび上がります。「封建的な価値観から、近代的な価値観への逃走」という、順行的なベクトルと、「封建的な価値観から、超古代への逃走」という、退行的なベクトルです。

私たちはしばしば、今日よりは明日、明日よりはあさつてのほうが、人類は幸せであるに違いない、と思います。しかしその一方で、過去の不都合を打ちこわして現在を生きているにもかかわらず、果たして過去のすべてを捨て去ってしまつてよいものか、と後ろ髪を引かれる思いにかられることもあります。「今」よりも幸せな「昔」があつたのではないか、と。いわゆる懐古趣味、ノスタルジーと言われるものは、すべての人に、了解可能な感情と思います。映画『ALWAYS 三丁目の夕日』の世界です。

本シリーズはある意味、この「今日よりは明日、明日よりはあさつてのほうが、人類は幸せであるに違いない」という思い込みに、期せずして待ったをかける役割を与えられた感があります。ファンタジーの本質が「敗者の哲学」にある以上、好むと好まざるとにかかわらず、こ

の論調から逃れられないのかもしれませんが。

念のために確認したいのですが、「敗者の語る歴史」とは決して、すでに確立した秩序や価値観を、覆すものではありません。別の言い方をすれば、歴史の流れが、逆行不可能になって初めて、敗者に発言権が与えられる、ということなのです。アメリカ先住民の勢力が、再起不能なまでに打ちのめされるまで、彼らの文明が評価されることは決してなかったと断言できませんし、プランテーション経済（アメリカ南部の場合は、綿花畑）が完全に消え去るまで、『風と共に去りぬ』のような名作でさえ、世に送り出すことは不可能だったに違いない、と私は思うのです。

私は、歴史文学の本質を、ある種の「アナザー・ワールド」に迷い込むことで、現在の閉塞感に活路を見出そうとする精神の試み、と考えています。そしてある意味、とても興味深いことですが、私たちがそのような「アナザー・ワールド」で会うことを期待しているのは、「今となつては本の中でしか会うことのできない」滅び去った人たちなのです。

ファンタジーではこの「願望充足」が、さらに明瞭に表現されます。「すばらしい魔法」や「すばらしい知恵」を持っているのはいつも被征服者です。彼ら（敗者A）は、主人公Bの敵Cによって虐げられたがゆえに、主人公Bに協力するのです。

① アナザー・ワールド

敗者A／勝者C

主人公B

② 現実の世界

自分B／困難C

「夢その③」で象徴的に登場した「かほちゃんの馬車」に乗って私が目指したのも、まさにそのような「アナザー・ワールド」（幻想と魔法の世界）だったのではないかと、私には思えるのです。

『ハリー・ポッター』シリーズを読んで私が感銘を受けたものに、「しもべ妖精」があります。『ハリー・ポッター』シリーズには、人間の魔法使いのほか、人間とは少し容姿の異なる、小鬼や水中人、トロールなども登場します。「しもべ妖精」もそのひとつです。

しもべ妖精は人間の半分くらいの大きさで、腕と指が少々長く、豚のような鼻とコウモリのような大耳、そしてガラス玉のような、大きな目を持っています。彼らは魔法使いの屋敷に住みついている、奴隷のような存在で、炊事をはじめ、ありとあらゆる雑用をさせられます。彼

らは、ご主人様が機嫌を損ねると、自分の頭を壁に打ちつけ、自分で自分を罰します。「ドビー、悪い子。ドビー、悪い子」と叫びながら（ドビーというのは、マルフォイ家に仕えていたしもべ妖精の個人名です）。以下に引用しますのは、ブラック家に仕えていたしもべ妖精、クリーチャーに関するものです。

バチンと大きな音がして、ハリーがシリウスから渋々相続したしもべ妖精（クリーチャーのこと。引用者注）が、火の気のない寒々とした暖炉の前に忽然と現れた。人間の半分ほどの小さな体に、青白い皮膚が折り重なって垂れ下がり、コウモリのような大耳から白い毛がぼうぼうと生えている。最初に見たときと同じ、汚らしいボロを着たままの姿だ。ハリーを見る軽蔑した目が、持ち主がハリーに変わっても、ハリーに対する態度は着ているものと同様、変わっていないことを示していた。（「ハリー・ポッターと死の秘宝」① 松岡佑子訳 二七三頁）

「クリーチャー——やめろ、やめるんだ！」ハリーが叫んだ。

しもべ妖精は震え、喘ぎながら床に倒れていた。豚鼻の周りには緑色の凍が光り、青ざめた額には、いま打ちつけたところにもう痣が広がっていた。そして、腫れ上がって血走った眼には、涙が溢れている。ハリーはこんなに哀れなものを、これまで見たことがなかった。

しもべ妖精は、言わば究極の弱者です。しかし彼らには、通常の魔法使いにはなしえない、ふしぎな能力のあることが、唐突に明かされます。幾重にも張りめぐらされた呪文をくぐり抜け、彼らは空間を、自在に移動することができたのです。

「わかってる——だけど、どうやって亡者もっじやから逃れたの？」

クリーチャーは、何を聞かれたのかわからない様子だった。

「レギュラス様が、クリーチャーに帰ってこいとおっしゃいました」

クリーチャーは、繰り返し返した。

「わかってるよ、だけど——」

「そりゃ、ハリー、わかりきったことじゃないか？」ロンが言った。「『姿くらまし』したんだ！」

「でも……あの洞窟からは『姿くらまし』で出入りできない」ハリーが言った。「できるんだったらダンブルドアだって——」

「しもべ妖精の魔法は、魔法使いのとは違う。だろ？」ロンが言った。「だって、僕たちにはできないのに、しもべ妖精はホグワーツに『姿現わし』も『姿くらまし』もできるじゃないか」

しばらく誰もしゃべらなかつた。ハリーは、すぐには事実を飲み込めずに考え込んだ。

（『ハリー・ポッターと死の秘宝』(上)二八〇頁）

実際、『ハリー・ポッターと死の秘宝』(下巻)において、ドビーが闇の魔女ベラトリックスに果敢に立ち向かい、ハリーやロンを窮地から救い出すシーンには感動します。しかしドビーの胸には、ベラトリックスの投げつけた小刀が突き刺さっていました。ハリーは安全な「貝殻の家」で悲しみにくれ、ドビーのために心をこめて、埋葬のための穴を掘ります。

「ハリー・ポッター」蚊の鳴くようなキーキー声が震えていた。「ドビーはお助けに参りました」

（中略）

「君は、この地下牢から『姿くらまし』できるんだね？」

ハリーが聞くと、ドビーは耳をパタパタさせて頷いた。

「そして、ヒトと一緒に連れていくこともできるんだね？」

ドビーはまた頷いた。

「よし、ドビー、ルーナとティーンとオリバンダーさんをつかんで、それで三人を——三人を——」

「ビルとフラーのところへ」ロンが言った。「ティンワース郊外の『貝殻の家』へ！」

しもべ妖精は、三度^{みなび}頷いた。

「それから、ここに戻ってきてくれ」ハリーが言った。「ドビー、できるかい？」

「もちろんです、ハリー・ポッター」小さなしもべ妖精は小声で答えた。

（『ハリー・ポッターと死の秘宝』⑤ 一二二頁）

全く価値のない存在など、この世にあるのだろうか。時々私は思います。劣ったもの、取るに足らないものとして、過去に置き忘れてきたものの中にも、本当は捨ててはいけない、大切なものがあつたのではないかと。

そういう小さなもの、弱々しいものが、私はとても好きだったので。これから紹介します。小さな物語が、皆様の心に、あたたかな明かりをともしますように。

はじめに

二〇一〇年
初夏

とく
な
の
ぞ
み

賽の河原

目次

第一話 番町皿屋敷 17

『補遺・その①』 処女凌辱の援助者 28

『補遺・その②』 皿屋敷伝説・滋賀県彦根市長久寺（二〇二二年九月加筆） 34

A. きじも鳴かすば 43

第二話 おおぐま座の神話 51

A. 牛の子イワン（ロシア昔話） 62

B. 妖精王ミディールと蝶になったエーディン（アイルランド神話） 67

C. ポーロツクの公フセスラフ 73

D. 隊長ブーリバ（ロシア文学） 76

第三話 クロコダイル・マン 89

A. 入れ墨の起源 95

B. 涙の小つぼを持つ子ども（ドイツの怪談） 99

C. フィツチャーの鳥（グリム童話） 109

第四話 森の家 115

A. 盗賊（ロシア昔話） 117

B. オレステス（ギリシア神話） 124

C. ロパーリ 137

D. ニーベルンゲンの歌（中世ドイツ英雄叙事詩） 139

『補遺』 ミミルの泉 178

第五話 十二羽の鴛鳥^{がちょう} 195

A. ローエン格林（ワーグナー） 200

『補遺・その①』 子どもたちのイジメ 214

『補遺・その②』 子どもたちのけんか 217

B. 白雪姫（グリム童話） 218

『補遺・その①』 インターネット情報によると 227

『補遺・その②』 ホグズミード 232

『補遺・その③』 スネイプの最悪の記憶 241

第六話 イオマンテ 247

A. コタン・コル・カムイ 252

B. 魚の夢 (中国の物語) 255

C. トルーデさん (グリム童話) 263

D. ダ・ヴィンチ・コード (アメリカ映画) 271

E. 最後の聖戦 (アメリカ映画) 277

おわりに 284

もうひとつの、おわりに 288

参考文献 292

第一話 番町皿屋敷

江戸時代のお話です。

昔、江戸の町に、火付盗賊改ひつけとうぞくあらためという役職があり、青山主膳しゅぜんという役人が、長官を務めておりました。

青山の最大の功績は、向坂甚内まささかじんないという盗賊の首領を捕らえたことですが、この男には、離れて暮らす妻と娘（お菊）がおりました。当時は「縁座えんざ」（親族の連帯責任）という考え方があり、向坂の妻と娘も捕らえられ、白洲に引き出されました。

青山はお菊（十六歳）に、自分の屋敷で下女として働けば、命を助けてやる、と言いました。お菊は、母の命も助かると思い、青山の屋敷へ上がりました。

お菊は朝早くから夜遅くまで、働きづめでした。掃除、洗濯、皿洗い、縫い物ぬいもの、など。ようやく布団を敷いてもぐりこむと、思わず涙が出ました。それでも、お菊は自分に言い聞かせました。「泣いちゃいけない、これでお母様が助かるのだから」

承応二年（二六五三）正月二日のこと、お菊は青山の奥方しゅうおうに、こうたずねます。

「母に年始のあいさつをするために、一日だけ、お暇をいただけませんかでしょうか」
すると奥方は、こう言います。

「おかしなことを言う子だねえ。どうやって、母親に会いに行くんだい？ おまえの母親は、

縁座でとうに処刑されたよ」

その時、お菊は来客用の南京皿なんきんざらの手入れをしていたのですが、あまりのことに、手にしていた皿を取り落とし、割ってしまいます。奥方は烈火のごとく怒り、その夜、お菊を主膳の前につき出します。

「私の目の前で、わざと皿を割ったのです。それなのに、謝りもせず、この態度です」

お菊は口を引き結んだまま、一点をにらんでいましたが、主膳を見ると、こう言いました。

「青山様は、私が下女として働けば、母の命を助けてくださると、お約束なさいました」
すると、主膳はこう言いました。

「そんな約束をした覚えはない」

「私が助けると言ったのは、おまえの命のことだ。それなのに、恩を仇あだで返すようなことを」
奥方が、こう言いました。

「十枚揃いの皿の一枚を割ったのです。指一本で償わせましょう」

お菊はぎょっとして、両手を握り合わせました。

「い、いやです」

主膳は無言を言わず、お菊を押さえつけ、指を一本、切り落としました。

「イヤアー！」

錯乱状態になったお菊は、縁側からそのまま庭へ走り出します。主膳が追いかけます。

お菊は庭の井戸まで駆けて行くと、キツと主膳をにらみました。そして、井戸にとびこみま
した。

「お、お菊」

主膳はあわてました。しかし奥方は落ち着いて、こう言いました。

「あなた、お菊は誤って井戸に落ちたのです。ただそれだけのことです」

次の朝、お菊の遺体は引き上げられ、役所へは事故死と届けられました。

しかし、これですべては終わりませんでした。

夜な夜な井戸に、お菊の亡霊が現れ、自分の指を数えるのでした。

「ひとつ、ふたつ、みつ、よつ、いつつ」

「むつ、ななつ、やつ、ここのつ」

目を上げて、おどろおどろしく、

「ひとつつ足りぬ、悲しやのう」

ヒュー、ドロドロドロ。

奉公人は皆逃げ出し、青山主膳と奥方は、精神がおかしくなりました。まもなく青山家は、
とりつぶされたということですが。

【解説】

これは、一七五六年に、馬場文耕ばばぶんこうが書いたといわれる『皿屋敷弁疑録さらやしきんべんぎろく』の内容を、かいつまんで紹介したものです。しかし驚くなかれ、「皿屋敷」と総称される怪談は、日本中に広く分布しているのです。

「皿屋敷」と総称される怪談は、この、江戸五番町（現・東京都千代田区）のものの他、兵庫県姫路市（播州皿屋敷）、滋賀県彦根市（長久寺）、福岡県嘉穂郡確井町（現・嘉麻市）（縄田家）などがあるようです。

下女の名は、一般的には「お菊」ですが、下女の名がわからないものでは、長崎県福江島五島支庁（お皿屋敷）、島根県松江市（雲州皿屋敷）、高知県幡多郡西土佐村（現・四万十市土佐）（下女の名はお滝）などがあるようです。

さらに、お菊という名の下女が殺され、主君にタタリをなすという物語としては、この他、主君の食事（汁椀など）に針を入れたと、無実の罪を着せられた下女お菊が、蛇のいる穴につき落とされて殺される話（※1）、主君が加賀から江戸へ移ったにもかかわらず、亡霊が馬に乗ってやって来て、馬士が「駄賃を給われ」（代金をください）という話（乗せてきたという若い女はその後、姿を消し、主君は高熱を出して死ぬ ※2）、などがあるようです。

※1 群馬県甘楽町（小幡信貞）、兵庫県姫路市（熊本主理）、埼玉県行田市（旧地名忍、家老の山田）など。

※2 小幡播磨、または有賀平三郎。主君（真田昌幸）が信州上田から、信州松代へ移封された際の話としては、小幡信実（かごかきが「駄賃を給われ」）。ただし、松代の小幡家の亡霊は、主君（信実）をとり殺すことはなく、邸内で数々の怪異をなしたということです。なお、小幡氏は、戦国時代に西上州（群馬県）一帯を治めた武将でしたが（武田家二十四将）、天正十八年（一五九〇）に滅んだということです。（豊臣秀吉の小田原城攻めの敗者）

ホラー漫画家の永久保貴一氏によれば、次のような推理が成り立つということです。信州（長野県）松代に退去した小幡信実が、その後、徳川家康に自分の息子を旗本としてさし出している。この、江戸の小幡氏の菩提寺が、なんと牛込（東京都新宿区）にあったという。だから江戸の「皿屋敷」の物語は、牛込を舞台とする『当世知恵鑑』（一七二二年）から始まったに違いない、と。（南京皿を割った、夫の愛人を絞め殺す、服部氏の妻）

しかし、永久保氏も認めるように、この話は、ただの怪談ではすまされないと、ということ

す。

なぜ下女の名が「お菊」なのかについては、全国に三千社余りある、白山神社はくせんに祭られている菊理姫きくり（または白山しろやま比咩ひめ）が関係しているのではないか、という説があります。「キクリ」とは「ククリ」であり、古代稲作文明の中で、竜神（水神）を慰撫いぶするために、若い娘を柱にくくりつけ、生贄にしたことと関係している、という説です。

しかし、その後の歴史の中で、白山神社は主に、処刑にたずさわる人々の間で信仰されたということでした。つまり「針」とは、「はりつけ」のことだったので。（「番町」「播州」「番場町（滋賀県彦根市）」など、「パン」の音へのこだわりは、番太、番太郎と呼ばれた、はりつけにされたさらし者の番をする役職と、関係があるようです）

「皿屋敷」につきましても、「さらし者」の他、タタリに見舞われた家がとりつぶされ、敷地が「更地さらち」になったからではないかとも言われますが、私は個人的には、斎場（火葬場）から帰った遺族にふりかける、清め塩の盛ってあった皿を割る習俗と関係しているのではないかと考えています。

処刑にかかわる人々というのはまさに、人の生と死にかかわる人々です。白山しろやま比咩ひめは、ワルキューレ（北欧神話に登場する死の女神。戦死者の魂を楽園へ運び去る）のような存在だったのかもしれないし、無実の罪に泣いた人々の魂を慰撫する存在とは、中世ヨーロッパの吟遊

詩人（ファンタジーの語り手）に比べられる存在だったのかもしれませんが、番太、番太郎は、はりつけにされたさらし者の、最後の身の上話を、聞いたにちがいないからです。

現代においても、推理ドラマや刑事ドラマが好まれるのは、社会の不条理や人間の怨念を、これほどわかりやすく映し出す鏡が、ほかにないからではないでしょうか。

私がこの物語群から連想するのは、次のことわざです。「一寸の虫にも、五分の魂」。

たとえ力のない下女であっても、正妻から見て憎い愛人であっても（※1）、無実の罪を着せて殺すことは許されない。あるいは本人の意思に反して、性的な関係を強要してはならない。

（※2）（※3）

※1 『雲州皿屋敷』はこの形式で、藩士秘蔵の十枚皿の一枚を井戸に捨て、下女に罪を着せるのは藩士の妻です。下女は井戸端で首を吊り、皿数えの怨霊になります（『本朝故事因縁集』一六八九年）。細かく書けば、上州国峰城城主、小幡上総介信貞侯の物語に登場する、美しい腰元お菊も、城主の愛人であり、汁椀に針を入れて無実の罪を着せ、お菊を蛇の穴に放りこんだのは、城主の奥方です。

※2 これら一連の物語群の中で最も年代が古いのは、室町時代（戦国時代）に成立した『竹叟夜

話』です。女主人公の名は花野はなと言いい、物語の舞台は、山名持豊やまなもちとよの治める姫路城の西郊、青山あおやまです。太田垣小殿佐おおたがきこどのすけの愛人であった花野に横恋慕した竹寺新右衛門たけでらしんえもんは、太田垣家宝のアワビ貝あわびの盃さかづき、十揃いのひとつを隠し、花野に罪をかぶせます。花野は竹寺にひもで吊るされ、棒でたたかれ、責め殺されます。(サデイズムの性倒錯。ただし、竹寺の背景に、「処女凌辱の援助者」の姿を見ることができません。補遺参照)

※3 『竹叟夜話』の発展形と思われるものに姫路城の『お菊井戸』があります。城主小寺則織こでらのりこと(在位一五〇四〜一五二一年)に対し、主家横領を企てる家老の青山鉄山てつざん。下女のお菊は忠臣衣笠きんぬがき鞠負之介ゆきえのすけ(または衣笠原信げんしん)の愛人でした。ところが、お菊と衣笠の奮闘もむなしく、青山の主家横領は成功し、お菊は青山の家来、町ノ坪弾四郎ちようのつぼだんしろうに無実の罪を着せられ、責め殺されます(ひもで吊るして撲殺。町ノ坪は、青山重宝の皿の一枚を隠す)。その後、井戸にお菊の亡霊が現れ、皿数えが始まります。お菊の呪いか、青山鉄山は失脚し、小寺則織は再び城を取りもどしたのでした。

たとえどんなに力のない人間であっても、反撃も、復讐も、絶対にできないような弱い人間であったとしても、ただひとつ、できることがある。それは心の中で、ただひと言、「私はこ

の人が嫌いだ」とつぶやくことである。

日本人は古来、このつぶやき、つまり人の怨念を、激しく恐れました。これが日本人の遵法性、善良性の起源ではないかと、私は思います。

〔まとめ〕

〈パターン・その①〉

(a) 一四〇〇年代。『竹叟夜話』

アワビ貝の盃と愛人花野／撲殺型

姫路市西郊の青山（地名）／太田垣小殿佐と竹寺新右衛門

(b) 一五〇〇年代初頭。『お菊井戸』または『播州皿屋敷』（一七四一年七月、大坂豊竹座で初演。人形浄瑠璃）

皿と下女お菊／撲殺型

姫路城／青山鉄山と町ノ坪弾四郎

〈パターン・その②〉

(c) 一五八六年（天正十四年）九月十九日

針と腰元お菊／蛇責め型

群馬県甘楽町／小幡信貞とその妻

曹洞宗宝積寺伝

(d) 一六四〇年ごろ

針と下女お菊／蛇責め型

姫路／熊本主理（該当人物、小幡修理）

『諸国百物語』（一六七七年）

(e) 一六〇〇年代

針と下女お菊／斬首型

加賀藩／小幡播磨↓有賀平三郎

『白石先生紳書』（一七一九年／享保四年）新井白石

〈パターン・その③〉

(f) 一六〇〇年代。

皿と下女／井戸端で首吊り型

鳥根県松江市／藩士某の妻

途中省略

続きは製品版にてお読みください。

著者プロフィール

とくな のぞみ

1962年、名古屋市生まれ。
名古屋大学文学部卒。心理学専攻。
精神分析学と口承文学の融合をライフワークにしている。二児の母。
著書『神話とファンタジーの起源』（2009年、幻冬舎ルネッサンス）、
『なぞときおとぎ話』（2010年、文芸社）

賽の河原

2012年12月15日 電子版発行

著者 とくな のぞみ

発行者 瓜谷 綱延

発行所 株式会社 文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060（編集）

03-5369-2299（販売）

<http://www.boon-gate.com>

© Nozomi Tokuna 2012 Coded in Japan

ISBN978-4-286-09554-7

- 本作品の全部または一部を複製、編集、修正、変更、頒布、貸与、公衆送信、翻案、配布する等の著作権及び著作者人格権侵害となる行為、および有償・無償に関わらず、本データを第三者に譲渡することは禁止いたします。
日本音楽著作権協会（出）許諾第1010055-001号